

様式 7 (Form 7)

学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

Resilience in Social Design Activities: Understanding the Rebounding Process of Craft and Design Practice in Indonesia

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

社会的デザイン活動のレジリエンス：インドネシアにおける伝統工芸とデザイン設計の再興過程について

人間社会環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) PRANANDA LUFFIANSYAH

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 鏡味 治也

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

Resilience in Social Design Activities: Understanding the Rebounding Process of Craft and Design Practice in Indonesia

Abstract

The craft and design practice in Indonesia is regaining its importance despite many regarding it as obsolete due to the industrialization of the nation from the beginning of 1980s to the late 1990s, which pushed traditional craft products to the margins. In recent times, there has been an increase in the number of designers, craftsmen, governmental institutions, and members of design academies practicing craft and design. They have addressed various issues, such as the revitalization of traditional craft products, or the improving economy and social conditions in the craft community in Indonesia. In this study, I explored the resilience of craft and design practice to understand the dynamic rebounding process of the practice from austerity. I investigated the activities of actors from various institutions to consent to, reevaluate, and reformulate the value of craft and design practice.

Throughout this research, I highlighted four elements underpinning the rebounding process of the craft and design practice by thoroughly attending to the dynamic entanglement of the micro scale and macro scale of activities. First, I looked at the institutional background and its dynamic activities, which explains the rootedness of craft and design activities in various institutions, such as academia, craft villages, and design communities. I looked at how the actors from these institutions have continuously redeveloped and reevaluated the concept of craft and design practice over the years, regardless of the scale of their activities. Second, I examined the roles of enduring traditions, highlighting persisting traditions at the local level that may allow or hamper the transformation process of traditional crafts, such as the crafting process, rural activities, limited technical tools, etc. Third, I considered the reconciliation of diverse frames; due to the involvement of many actors in the practice, the confluence of the diverse ways of thinking in a particular design project is frequently visible. I accentuated the role of sociotechnical devices as an organizational tool to reconcile the diverse ideas of multiple participants. Fourth, I highlighted the resourceful strategies, exploring the ability of designers and craftsmen to evaluate the obsolete image of traditional craft products engendered by the prevalence of manufactured products. Subsequently, I explored the multiple design strategies in use through the collaborative design process in bringing transformation to traditional craft products.

This dissertation has implications to extend the micropolitical scale activities of design by paying attention to broader influences, such as the historical, geographical, and political conditions that have strongly informed and influenced design practice.

学位論文要旨

1980年代から1990年代末にかけて、インドネシアでは政府主導の工業化が始まり、同時に伝統的な工芸品や製品は二次的なものとなった。それらはもはや時代遅れのものという認識が多くあるが、今日のインドネシアにおいて、伝統的工芸品とそのデザインの重要性が再び高まりつつある。現在、デザイナーや職人、公的機関、あるいは技術やデザインを学ぶ専門学校の数が増加しており、このことはインドネシアにおける伝統工芸品の再興、クラフトコミュニティの社会的環境および経済的な改善を示している。本研究は、一時の緊縮状態からのダイナミックな復興過程を明らかにするために、様々な機関および人々による活動を調査し、工芸とデザインの価値を再評価および再検討することで、この伝統工芸の再興について考察するものである。本研究を通じ、伝統工芸およびデザインの復興過程はいずれもミクロとマクロな活動の両面における4つの要素から成ることが明らかとなった。

第一に、組織的な背景とそこでの精力的な取り組みである。学校、クラフトビレッジ、デザインコミュニティなどの様々な組織における工芸とデザインに関する活動の根幹を理解するために、活動の大小にかかわらずこれらの活動に携わる人々が、長年にわたってどのように伝統的工芸とデザインの再開発および再評価を行ってきたのかという点に着目した。第二に、伝統の持続性である。ローカルレベルでの伝統の継承は、技術工程や道具、地域での活動などの伝統的工芸に関する変化を促すあるいは妨げるものであり、特にその点について考察を行った。第三に、多様な枠組みの調和（協調）である。特定のデザインプロジェクトにおいては、多くの人々が関係するために、多様な考えをまとめることが求められる。複数の関係者の多様なアイデアをとりまとめる社会技術装置の役割について検討した。第四に、デザイナーや職人たちの知恵である。彼らが工業製品の普及によってもたらされた時代遅れなイメージを伴う伝統工芸の価値を見出すための能力を調査した。さらに、伝統工芸に変化をもたらした共同的なデザイン設計を通じた、複合的なデザイン方法についての調査も行った。本博士論文は、歴史的、地理的、およびデザイン設計に大きな影響を与えている政治的な状況といったより広い影響について着目することによって、デザイン活動のミクロ政治学的な視座を広げるものである。

学位論文審査報告書

平成31年 1月25日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学専攻

氏名 Prananda Luffiansyah

2 学位論文題目（外国語の場合は，和訳を付記すること。）

Resilience in Social Design Activities: Understanding the Rebounding Process of Craft and Design Practice in Indonesia

（社会的デザイン活動のレジリエンス：インドネシアにおける伝統工芸とデザイン設計の再興過程について）

3 審査結果

判定（いずれかに○印） ☒合格 ・ ☐不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・☒学術）

4 学位論文審査委員

委員長	鏡味治也	⑨
委員	西本陽一	
委員	正木 響	
委員	市原あかね	
委員	中島弘二	
委員		

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は、インドネシアの近代化過程において近代産業育成重視政策の中で一時軽視された伝統工芸が、近年になって創造的産業の重要な要素として見直されるようになっている状況を背景に、単なる伝統製品の生産にとどまらず、市場の需要に対応する新たな製品を生み出すために、デザイナーと工芸職人がいかに協同すればうまくいくのかを探った論文である。表題にいう“Social Design”は、製品デザインをデザイナーの独断的行為とするのではなく、その置かれた社会状況を踏まえ、社会の向上に寄与するようなモノを生み出していこうとする行為としてデザイン学で1970年代以降提唱されてきた概念である。また“resilience”はデザイナーの修得したデザイン学、工芸職人の身につけた製作技法、さらに工芸制作を支えてきた素材供給や作業分担といった各種システムが、一面では変化を拒む障害とみなされつつも、うまく調整し活用することで、新製品の産出を妨げるどころかそれを生み出すバネとなり、新産業発展につながるものであるという意味を込めて使われている。こうした論点を、筆者はインドネシアのデザイナーと工芸職人が協同で新製品を開発しているいくつかの工房で調査を行って、その協同作業がうまくいくための要点を検証している。

第1章の問題設定のあと、第2章の先行研究概観では、social designや、そのためにデザイナー以外のたとえば工芸職人など実際の制作にかかわる者のデザインへの参加を促すparticipatory designといったデザイン学での議論、また社会生態学や社会工学といった分野でのresilienceの議論を参照して、デザイン・工芸協同実践の可能性を探るための4つの視点を抽出する。すなわち異なる分野/制度を背景にした多様なアクターのダイナミックな相互交渉、そうした複数の分野/制度およびそのアクターの間の調整過程、伝統的制度や技法が新製品開発を下支えすることの再評価、利用できる素材や技法を有効に活用する柔軟な姿勢の4点である。

第3章は独立以後のインドネシアの国づくりの過程で伝統工芸が占めてきた位置を概観する。独立後1970年代まではその豊かな伝統工芸は国の文化アイデンティティを表出するもののひとつとして、美術界やデザイン界も関心を寄せていた。しかし1980年代から90年代末まで国が進めたハイテク産業育成重視政策のなかで、伝統工芸への関心はうすれ、わずかに心あるデザイナーが工芸職人と共同して新たな製品開発を試みる工房がいくつか生まれた程度だった。1997年のアジア通貨危機と翌1998年のスハルト長期独裁政権の崩壊後、ハイテク産業

の多くが苦境に立つ中で、2010年代になると政府は「創造的経済振興」を唱えるようになり、その有力な資源の一つとして伝統工芸が政府からもデザイン界からも再び注目されるようになり、大学出のデザイナーが工芸職人と協同する工房が官主導でも民主導でも作られるようになって今日に至っている。

第4章はそのうちの政府主導のデザイナー・工芸職人協同実践の一例を、実際の両者間の打ち合わせでの観察も交えて検証している。公募で選ばれた新進気鋭のデザイナーが、ホテイアオイの葉で籠などを編むジャワの主婦たちと協同して、ヨーロッパにも輸出できるような製品を作るプロジェクトで、8か月という短期間のなかで、需要調査をしたデザイナーがデザインを提案し主婦が制作する。その一連の過程を政府管轄下のデザインセンターの評価委員が監督し、成否の評価を行うという政府プロジェクトである。そこで筆者が協同作業の成否のカギとして見出したのが、イメージ図を使った最初の提案と意見交換の双方向性や、デザイン決定後に現場とのやり取りのなかで調整を即座に行うSNSを利用した迅速な修正対応、打ち合わせや修正ごとに記録するプロGRESS・レポートのもたらす相互理解の効用などである。

第5章はデザイナー自身が工芸職人と組んで工房を興し、新製品の開発を行って成功しているジャワの竹細工とバリの金属食器制作のふたつの工房の実践を扱う。ふたつともすでに一定期間協同実践を継続してきており、先の短期政府プロジェクトに比べて、職人たちの意向はより強くデザインに反映されているが、それはまず技法的な制約による。そのためデザイナーは職人の身につけた技法やその扱う素材の特性について配慮せざるを得ず、結果としてより双方向的なデザイン形成が生まれている。

第6章は考察と結論で、第4・5章で描写した工房の具体例を、2章で抽出したデザイン・工芸協同実践を見る4つの視点から検証し、その創造的新産業創出の豊かな可能性を強調している。

デザイン学や関連する社会工学等の領域での議論を広く渉猟して自身の分析視点を設定し、独立後のインドネシアにおける伝統工芸の位置づけを文献資料から丹念に描き出し、デザイナーと工芸職人の協同実践の3か所の現場を訪ねて、両者の交渉過程を実地見分するなど、理論・データ両面で手堅く説得力のある議論を展開している。自身デザイン学を修めた経歴から、ややデザイナーよりの視点になり、職人の見方やその生活背景が最低限の記述にとどまること、成功例が主に取り上げられ失敗例の考察がないことが惜しまれるが、それも本論文の主張を疑わせるものではなく、博士論文としての内容を十分に備えたものと審査委員一同判断した。